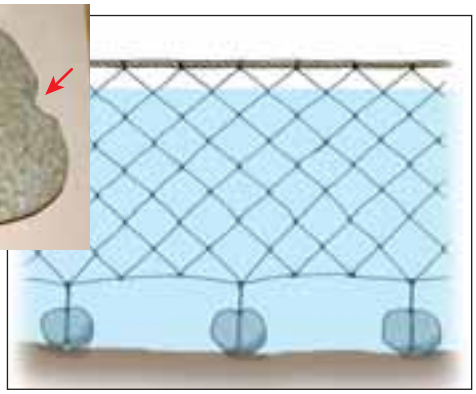
縄文時代の川漁 … すでに基本は今と同じに

（上）石のおもり。くぼみがついている。
（帯広百年記念館：※3）



石のおもりの使用イメージ。

縄文時代の人々にとって、サケなどの川魚は大切な食べ物でした。ですから、川での漁をさかんにおこなっていました。

豊頃町の「高木１遺跡」、浦幌町の「平和遺跡」や「下頃辺遺跡」からは、小さなくぼみがつけられた石がたくさん見つかっています。くぼみのおかげで、ひもをしばりつけやすくなっています。

これは、およそ7,500年前、川で魚をとる時に網につけられたおもり（石錘）です。

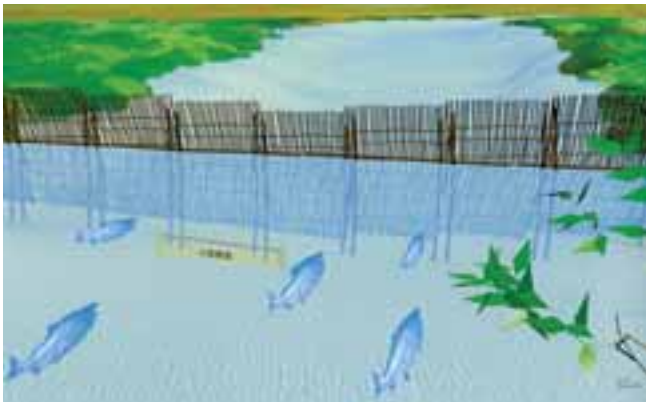
石狩市にある「紅葉山49号遺跡」では、およそ4,000年前の「エリ」という川魚をとるしかけが見つかりました。エリは、川の流れの中に木のくいの列を作ったもので、魚をワナの方へ向かわせるしかけです。

紅葉山49号遺跡のエリには、サケ・マスをとるためのものと、くいの間をヤマブドウのつるで編みこんだ、小さな魚をとるためのものとがありました。

このほか、タモ網、丸木舟（一部分）、舟をこぐための櫂、魚をたたくための棒、魚をつくためのモリやヤス（石製や骨角製）、たいまつ用の道具、舟の形をした皿、すだれのように細い木がたくさんならんだもの（柵？）などが見つかり、縄文時代には今に通じる川漁がおこなわれていたことがわかりました。

残念ながら、こうしたあとは十勝では見つかっていません（木の道具はふつうくさってしまう）が、同じ方法で漁がおこなわれていたのかも知れません。

紅葉山49号遺跡（石狩市）で見つかったエリのあと。木のくいが一列にならんでいる。
（写真：石狩市教育委員会蔵）



エリのイメージ。
（CGイラスト：石狩市教育委員会蔵）

チョウザメ。十勝川には昭和時代なかばまでいたという。
（浦幌町立博物館：※4）

芽室町の西士狩４遺跡（およそ 6,000 年前）では、サケ（？）、イトウ、ウグイの仲間とともにチョウザメの骨が見つかりました。

チョウザメがここまで十勝川をのぼっていたこと、また、ウグイの仲間がマルタ（河口近くから海にすむ）らしいということから考えると、このころの十勝川河口は、かなり上流に入りこんでいたようです。

当時は今よりも暖かく、海水面が高くなっていた「縄文海進（→ｐ84）」のころでした。

※３　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地　電話 0155 - 24 - 5352　月曜日休館

※４　浦幌町立博物館（うらほろちょうりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16 - 1（らぽろ21内）電話 015 - 576 - 2009　月曜日休館